

研究結果報告書

VOC（オランダ東インド連合会社）の朝鮮進出と日本貿易維持政策
－VOCの日本貿易と朝鮮貿易構想の本質を中心に－

所属 東亜大学校 中国日本学部
役職 副教授
氏名 申東珪

本研究は「VOC(オランダ東インド連合会社)の朝鮮進出と日本貿易維持政策-VOCの日本貿易と朝鮮貿易企図の本質を中心に」という課題であるが、主にオランダVOCの朝鮮貿易の計画やその試みについての検討を通して、なぜ朝鮮貿易を断絶して日本との貿易を維持しようとしたのかについて考察したものである。まず、本研究の結果報告書を提出するにあたり、新たに発見した内容と把握した史実、そして研究結果と関連して口頭発表した内容などについて以下簡単に報告する。

第一に、朝鮮とオランダの関係について言及する際、その開始の時期を日本とほぼ同時期である1610年に見なければならぬという点である。これは韓国で1627年の朴淵など3人と1653年ハメル一行36人の朝鮮漂着からオランダとの関係が開始されたという表面的な俗説を反証することで、朝鮮の西洋関係という面における絶対看過してはいけない史実である。

第二に、これまでオランダの東アジア(特に北東アジア)との関係において日本だけがその対象とされてきたが、当時の朝鮮も視野に入れておかないと、オランダの東アジア貿易活動の総体的な議論ができないという点である。当時VOCは日本だけではなく朝鮮とも貿易通商計画を持っており、実際に17世紀初頭から半ばまで数回にわたって「金銀島探査」とともに朝鮮とも貿易を図っており、これは1668年に朝鮮貿易のためにコレア(Corea)号という商船を建造したことからも確認できる。

第三に、VOCが17世紀初頭から活発に進めてきた朝鮮貿易を1670年代前後に撤回した最大の理由は、多くの利益を出していた日本との貿易に支障をまねかないためであったという点である。朝鮮貿易を試みたのはVOCの利潤極大化の方便であったが、これは日本市場を不安に落させる最大の原因にもなるはずであり、さらにもっとも重要なのは日本という東アジアにおける貿易拠点その自体を失う危機感があったからである。つまりオランダの朝鮮貿易撤回は一般的に言われる日本の妨害ではなく、日本貿易をより重要に考えていたVOCの独自の判断によるものであった。

第四に、本研究課題を推進した結果の口頭発表に行いて報告する。本研究の一部の内容については、2010年10月27日全北大学博物館で主催した「人と海」という講演会で「海洋オデュッセイア「ハメル報告書(ハメル漂流記)」と西洋漂流民」という主題で口頭講演をしており、また 2016年9月23日に「第15回 関斗基記念文庫学術セミナー(歴史的に見た東アジアの海洋ネットワーク)」(木浦大学)では「ハメル一行から見た朝鮮・オランダ・日本の海域史」という題目で口頭発表を実施した。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

- 発表題名 : ハメル報告書(ハメル漂流記)と西洋漂流民
発表者 : 申東珪
会議名 : 全北大学校博物館主催の「人と海」講演会
日時 : 2010年10月27日、午後3時～5時
場所 : 全北大学博物館2階の大講堂
- 発表題名 : ハメル一行から見た朝鮮・オランダ・日本の海域史
発表者 : 申東珪
会議名 : 第15回 閔斗基記念文庫学術セミナー(歴史的に見た東アジアの海洋ネットワーク)
日時 : 2016年9月23日、午後2時～5時
場所 : 木浦大学校教授会館2階のセミナー室

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

書籍発刊予定 (題名・著者名・出版社・発行時期等)

- 書籍題名 : 近世日本の国際関係と対外認識
著者 : 申東珪
出版社 : 景仁文化社
発行予定 : 2018年10月1日(出版社と協議中)